

○熊谷伸子 荻村昭典

(文化女大・院)

目的：わが国の消費構造において、50歳代女性が注目されている。団塊の世代とも称され消費活動における自己決定権が高く社会全体に影響を及ぼしていると思込まれる。その動向は、ファッションの流行予測においても不可欠の要素である。本研究ではこうした女性達を対象とする意識調査に基づき、購読雑誌の影響を含めてそのファッション行動を評価することに主眼をおいている。

方法：本研究においては、1998年8月に50歳前後の女性498名を対象に郵送による質問紙調査法で行った調査データを用いた。このデータソースは、文化女子大学情報科学研究所による。質問内容は、ファッション行動に関する26項目、購読雑誌に関する5項目である。ファッション行動に関しては、「全くそうである」から「そう思わない」までの4段階尺度で回答を求めた。解析には、主成分分析を用いた。購読雑誌の解析には、クラスター分析を用いた。さらに、購読雑誌とファッション行動との関連をt検定により検討した。

結果・考察：50歳代女性のファッション行動に対する意識構造について解析を行ったところ、4つの主成分が抽出された。第1は着装への自信、第2は情報収集への重視、第3は浪費的志向、第4は個性的志向である。累積寄与率は、44.1%である。購読雑誌についての解析をクラスター分析を用いて行ったところ、2つのグループに分類された。第1のグループは、日常生活に密着した内容を主としているものであり、第2のグループは、流行などのファッションを主としたものである。前述の意識と購読雑誌の関係を明らかにするために、クラスター分析で分類した雑誌のうち代表的な2誌の購読者によって、調査対象者を分類して検討した。その結果、着装への自信、個性的志向の高い人は、日常生活に密着した内容を主としている雑誌よりも、流行などのファッションを主たる内容にしている雑誌を積極的に購読していることが平均値の差の有意水準5%で認められた。すなわち、ファッション行動に対する意識の違いは、購読雑誌の相違によっても伺い知ることが可能であることが本研究により明らかになった。